

【卒論報告】

デオダ・ド・セヴラックと地域主義 後期作品におけるカタルーニャ的要素の使用

横屋 藍 (音楽文化教育学科音楽文化教育専攻音楽情報専修 平成30年度卒業)

作曲家デオダ・ド・セヴラックDéodat de Séverac(1872~1921)の「地域主義」という思想について、その背景や作品への反映を扱った。



セヴラックのポートレート

セヴラックって？

デオダ・ド・セヴラックは、ドビュッシーやラヴェルと同時代のフランスの作曲家だ。パリのスコラ・カントルムでピアノや作曲を学んだが、その生涯の大半を出身地である南仏で過ごした。彼が生きた時代のフランスは中央集権化が進み、パリがすべての中心地。音楽も例外ではなく、作曲家として名を残したいのであればパリで受容されることが絶対条件だった。そのような時代において、セヴラックは各地方の豊かな伝統から創作は行われるべきだと主張し、自らパリを離れることで、音楽における「地域主義」の推進を目指した。



セヴラックの生家

セヴラックの「地域主義」

セヴラックはスコラ・カントルムを卒業する際に、卒業論文『中央集権と小さな礼拝堂』を提出している。この論文の中で主張されているのが、「地域主義」という思想だ。中央集権は文化の多様性を無視している、という考えを持っていた地域主義者たちは、「パリはフランスの一部にしかすぎない」として、中央集権と対立する立場を取っていた。このリーダー的存在といえるのが、フランスの詩人であるフレデリック・ミストラルだ。彼はプロヴァンス語での創作だけでなく、「フェリブリージュ」という文芸団体の創設メンバーとしても知られている。セヴラックは一地方言語の復興に力を注いだミストラルを理想の芸術家とし、その思想を音楽へ応用することを目標とした。

当時のフランスは中央集権化が過度に進み、芸術家たちも出自に関わらずパリで活動することが求められていた。そのため、その頃に書かれた作品の大半がパリの聴衆から良い評価を得ることを目的としており、作曲家たちはそれぞれの地方によって育まれる個性を捨てなくてはならなかった。セヴラックはそのような状況を卒業論文で痛烈に批判しており、各地方特有の民謡や民俗舞踊を学ぶ新しい音楽教育の場を作ることで、当時のパリ中心の音楽状況を脱することができると提案している。セヴラックは生涯を通して地方の音楽学校の創設の夢を抱き続け、その意思は彼のピアノの先生であり、彼の作品の初演を多数行ったブランシュ・セルヴァに引き継がれた。

「カタルーニャ文化圏」とは

約11年通ったスコラ・カントルムを卒業したセヴラックは、すぐに出身地である南仏に帰った。しかし彼が晩年を過ごしたのは、同じ南仏でありながら出身地とは異なる文化圏にあるセレという町である。「カタルーニャ文化圏」に属するこの地で、セヴラックはカタルーニャの文化に触発された作品を多く残した。

カタルーニャといえば多くの人はスペインを思い浮かべるだろうが、広義ではフランスやイタリアの一部を含む大きな文化圏である。カタルーニャは「スペイン王位継承戦争」や「スペイン内戦」など、長く弾圧に苦しんできた。自治政府や議会の廃止、カタルーニャ語の公的な使用の禁止、さらには伝統芸能までもが禁止された歴史を持っている。そのような中において、19世紀半ばに芸術家や著述家による「ラナシェンサ」が起こった。これは政治的な独立にエネルギーを費やすよりも、音楽や文化へとそのエネルギー



を向けることで文化的な独立を目指した運動である。

不特定の人数の踊り手が男女交互に高く上げた手をつなぎ、内側を向いて輪になって踊る伝統的な舞踏「サルダナ」や、その伴奏を担当する「コブラ」というカタルーニャのアンサンブル集団も、19世紀に入ってから音楽家ペップ・バントウラという人物によって新たに作りなおされたものの一つだ。セヴラックはセレに移住してから数カ月後に初めてコブラを聴き、その響きに感銘を受け、作品に取り入れていった。

ある夜、人生で初めてコブラを聴いた。その日のことは昨日のことに思いつける。コブラはそれまで私が知らなかった音色、喜び、情熱を持っている。ヴァレスピールは私の夢の地だ！この夢は《エリオガバル》の作曲によってついに実現された。

Waters (2008), p.204.

カタルーニャ的要素を持つ作品

この《エリオガバル》というのは、セヴラックの二作目のオペラ作品である。紀元後3世紀ごろのローマ帝国が舞台のこの作品は、南仏のベジエにある野外劇場での上演のために作られた。野外作品を書くことをパリ時代の先生や友人には強く反対されていたが、南仏の太陽を浴びて育ったセヴラックにとっては長年抱いてきた夢であり、ここにも彼の地域主義の思想が表れている。

コブラの音色は当時のパリの人々にとって「異質な」響きだったため、大きな反響を呼んだ。ベジエでの初演の後に行われたパリでの公演は多くの作曲家が観劇し、ガブリエル・フォーレからも絶賛された。この作品でセヴラックは地方の音楽要素の特徴を際立たせ、パリで日々消費される音楽との明確な違いを提示することに成功したと言えるだろう。異質な音をそのままに使用する姿勢からは、地域主義者として「真正」であることを探求した誠実さをうかがうことができる。

彼の代表曲といえるピアノ組曲《セルダーニャ》も、カタルーニャの要素を持つ作品だ。この作品は、カタルーニャ文化圏の一方地方であるセルダーニャをセヴラック自身が旅した経験をもとに書かれた。セルダーニャはフランス領とスペイン領にまたがっている地域である。構成曲5曲のうち4曲のタイトルにはセルダーニャ地方の地名が使われ、「タルタナ」というカタルーニャ地方の伝統的な二輪馬車も曲名に登場するなど、使用されている言葉からもカタルーニャを意識していることがわかる。

セヴラックって…

出身地とは異なるカタルーニャ地域に魅了された理由の一つには、ラナシェンサにおいて地域特有の文化が守られ、作られた過程を、地方の文化の再生が可能であるという成功例として捉えていたことが考えられる。中央集権によって失われていく各地方の文化を保護する必要性を感じていたからこそ、カタルーニャ特有の要素を作品に用いたのだろう。地位や名声を捨て、自ら「非中央集権化」し、南仏の太陽からインスピレーションを受け創作を行ったセヴラックは、真の地域主義者だと言えるのではないだろうか。



サン＝フェリックス＝ロラゲ

<おすすめの入門文献・音源>

- ＊ 椎名亮輔「デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画」アルテスパブリッシング、2011年
請求記号●J120-874
- ＊ 館野泉“Piano works of Déodat de Séverac” Finlandia Records,[2001]
請求記号●XD46740

<主要参考文献>

- ＊ 椎名亮輔「デオダ・ド・セヴラックの論文『中央集権と音楽の党派性』解題と翻訳」『同志社女子大学学術研究年報 60』pp.91-105、2009年●CiNii
- ＊ 田澤耕『カタルーニャを知る事典』平凡社、2013年
請求記号●J126-282
- ＊ Waters, Robert. Déodat de Séverac: Musical Identity in Fin de Siècle France. Hampshire/ENG: Ashgate Publishing, 2008.
請求記号●J114-409
- Musk, Andrea. “Aspects of Regionalism in French Music during the Third Republic: the Schola Cantorum, d’Indy, Séverac and Canteloube.” PhD Dissertation, Oxford University, 1999.

セヴラックのポートレート
椎名亮輔『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』アルテスパブリッシング p.4

よこや あい ● 多くの先生方、友人に支えられ充実した4年間でした。セヴラックを一人でも多くの方に知っていただける機会になれば幸いです。

